

第 53 回目 主にあって強くあれ (8)

はじめに

●これまで学んできた神の武具は、右のチャートにあるように七つです。今回は神が私たちに与えてくださっている第七番目、つまり最後の神の武具である「御霊による祈り」についてです。

神の武具	
防 御	(1) 腰に真理の帯を締める
	(2) 胸に正義の胸当てを着ける
	(3) 足に平和の福音の備えをはく
	(4) 信仰の大盾を取る
	(5) 救いのかぶと(冠)をかぶる
攻 撃	(6) 御霊の剣を受け取る
	(7) 御霊によって祈る

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 6章 18節

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

●パウロが示す最後の武器は「祈り」です。「御霊の剣」とは「神のみことば」のことでしたが、今回は「御霊による祈り」です。その祈りとはどんな祈りなのでしょう。いろいろな祈りがあると思います。祈りの種類としては、感謝、賛美、告白、願い、とりなしといった祈り。祈りの方法としては、口に出す祈り、しかも大声で激しく祈る祈りもあれば、沈黙や断食を伴う祈りもあります。しかしここでは、そうした種類とか方法ではなく、またある課題のための祈りというのでもなく、ただ「神との親しい交わり」としての祈りを考えたいと思います。



●パウロのエペソ人への手紙の書き方、説得の論法によれば、重要なことは最後にくるということです。6章 10節「終わりに言います。これは順番として最後に言っておきます」といった付け足し的な言い方ではありません。要の石として一当時の建物の組み方を参照し、全体のすべてがしっかりと意味を持ってくる—そんな位置づけを持っているものが最後にくるのです。とすれば、神の武具の場合には、「御霊による祈り」こそが、すべての神の武具に力を与えるものなのではないかと考えます。

1. 最高の特権としての祈りの生活とその系譜

(1) 特権としての祈り

●聖歌の中に「祈りに関する」歌があります。ひとつご紹介しましょう。

- ① 楽しき祈りよ 浮きこの世を離れ 御位(くら)に近づき神と語らしむ
悩みてありし日、ここにいていくたび、試むる者の畏より逃れし
- ② 楽しき祈りよ なが羽は運ぶ 渴ける心をわが主の御前に
みことば唯一の手がかりとなして 求むるこの身に安きを持たしむ

אגרת שאול אל האפסים

③ 楽しき祈りよ わが目は見渡す ピスガの峰より天なる御国を
この身はまもなく肉の衣を脱ぎ 叫びつつ昇らん「さらばや、浮世」と。

●祈りを「楽しい」と感じられたことはありますか。40~50人ほど日曜の礼拝に集まる教会でも、祈祷会になると、数人という教会が多くあります。なぜでしょう。それは、祈りをいつも特権としてではなく、義務とみなしているからではないでしょうか。祈りを考えるとき、なさねばならない義務と考える。しかし、祈りは特権であって、感謝をもって受け、喜びをもって活用されるべき賜物なのです。みことばを唯一の手掛かりとして神を知り、神からの励ましを与えられていくすばらしい時です。祈りは、まさに私たちの人生を意味あるものとして受け取っていく数々の機会を提供してくれる至福のときです。それがなぜ、楽しいと思わないのでしょうか。そのひとつは、祈りが神との親しい交わりでなく、とりなしという働きにすり替えられてしまったからです。

●私たちの教会では、朝のサムエル・ミニストリーでは極力「とりなしの祈り」を入れないようにしています。神との十分な生きた交わりの中に生きていなければ、とりなすことは苦痛であることさえあるからです。働きとしての祈りではなく、「楽しき祈り」-神との至福の親しい交わりのときとしなければなりません。そそくさと義務だけ果たしているような、形ばかりの義務的な祈り会では、足が遠のくのも無理はありません。いつの間にか、教会は、人生の最高の特権である神との親しい交わりをどこかで、自ら放棄してきたように思います。祈りを楽しいものではなく、働きに代えてしまったからです。

(2) 祈りの生活の系譜

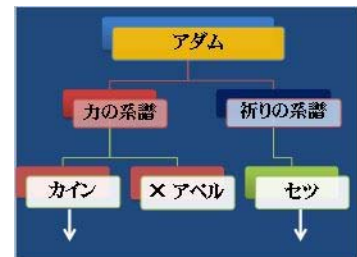
●祈りは神によって造られた人間しかできないものです。他の被造物には絶対にできません。猿がどんなに進化したとしても、神に祈ったりすることはできません。祈りは神が人間に与えた特権です。しかし、すべての人間が祈りという神との交わりをしてきたわけではありません。その系譜を見てみましょう。

① カインの系譜

●カインの系譜は、神に祈ることをせず、人を威圧する力によって都市文明を築いていく系譜です。殺戮と復讐による支配の歴史をたどります。

② セツの系譜

●カインの系譜とは逆に、人の弱さ、もろさを認めつつ、神に祈って生きようとする系譜です。祈りの生活化を実現する系譜、神とともに生きる系譜です。セツは自分の子エノシュが生まれたとき、「そのとき、人々は主の御名によって祈ることをはじめた」(創世記 4:26)とあります。これを機に、神を信ぜず、祈ることもしない不敬虔な流れと、神を信じて祈る敬虔な流れとがはっきりと分かれていくのです。エノクに至っては、特別に「神とともに歩んだ」と記しています。



5:22 エノクはメトシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。そして、息子、娘たちを生んだ。

5:23 エノクの一生は三百六十五年であった。

5:24 エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。

אגרת שאול אל האפסים

●エノクの生涯は 365 年。息子メトシェラが生まれたのは彼が 65 歳の時、それから彼は神とともに歩みはじめました。実に 300 年間です。彼が祈ったということばこそありませんが、セツが主の御名によって祈り始めたその系譜はその子孫に受け継がれ、エノクに至っては特別に「神とともに歩んだ」とあるのです。祈りの系譜は、それが生活化され、ライフスタイルとして受け継がれ、エノクはその模範となったということが、「神とともに歩んだ」という内実です。

●「神とともに歩む」の「歩む」とは、常習的にすることを意味します。つまり、ひとつの「ライフスタイル」を意味します。生きている限り、神との親密な交わりを継続する生活、それを「祈りの生活」と言います。エノクはその模範者なのです。エノクは、いわゆる大きな事業はしませんでした。しかし神とともに歩むということ、神との交わりを楽しみとし、祈りを生活化するという大事業を行ない、それを全うしたのです。その祝福の結果は不思議でした。なぜなら、「神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」と記されているからです。

●神と親しく交わるという祈りの生活化、そのものが、神の目から見れば、大事業なのです。この世ではそれはたいしたことではないと思われるかもしれませんが。しかし祈りの系譜の流れにある者にとっては、歴史を越えて、光を放つことなのです。私たちの神による選びも、祈りというすばらしい歩みの大事業をなすように招いてくださったと信じます。

●祈りの生活を別のことばで言うなら、イエシュアが言われる「わたしにとどまりなさい」だと言えるでしょう。御子イエシュアは人としてこの世に生まれてからも、「必ず自分の父の家にいる」と言われました(ルカ 2:49)。そのことを肉の両親であったヨセフとマリヤは分かりませんでした。なぜなら、御父のところにとどまる歩みは、神(あるいは御霊)の助けなしにはできないからです。神を父と呼び、その愛の交わりの中にとどまり続けることができるのは、御霊の助けがあったからだと信じます。ですから、「御霊によって祈る」という表現は理にかなっているわけです。私たちが御霊の助けを通して、御子が御父のうちにとどまっておられたように、私たちが主のうちにとどまらなければ、先の聖歌のように「楽しき祈りよ」と歌うことはできないのではないかと思います。ちなみに、「とどまる」ことを、ヘブル語では「立つ」という意味の「アーマド」(עמד)という動詞で表します。おそらく、それは自分の本来の立ち位置に堅く立つことを示唆していると思われます。

2. 祈りの領域

●詩篇は、神と私たちの生きた関係を築く上で最高のテキストであり、それを窓にして、聖書全体に思いを馳せながら、神をより深く、より親しく知るための瞑想のための手引きです。キリスト教の歴史においては、詩篇の瞑想の長い歴史があり、特に、修道院では聖務日課として必須のものでした。知性的な瞑想から黙想(沈黙)へ、そして観想の世界へ。それはもう言葉ではなく、五感のすべてを通して神を味わう世界です。主にある者がともに詩篇の瞑想を分かち合うなら、より豊かな永遠のいのちの世界が開かれてくると信じます。

●祈りの世界には、口頭の祈り、瞑想の祈り、黙想の祈り、観想の祈りの領域があります。この四つの領域は相補性的な関係にあります。ひとりの人の中に四つの領域が同時に存在しているのです。神のことばについて知性的

に十分な理解ができなくても、感性の世界を経験できます。ことばによる祈りが上手にできず、その表現が幼稚であったとしても、神を感じ、神を味わい、神を愛することができるのです。感じる領域、それは観想の祈りの領域なのです。

●瞑想の祈りは、神について、あるいは神のことばを、知性をもって思索しながら、神と交わりをする領域です。この領域を豊かにするためには、毎日、私たちが食事をするように、また幼児が食物をしっかり和噛みながら栄養を取って成長していくように、神の子どもである私たちも神のみことばを毎日読み、絶えず学び続ける訓練が必要です。

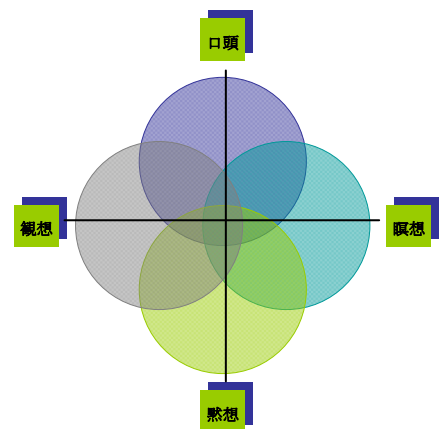
●黙想の祈りは、瞑想の領域にあるものを、沈黙の中で熟成させる領域です。味噌や醤油、あるいはぶどう酒などは樽の中に入れてじっくりと寝かせ、熟成させることで作られるものです。寝かせれば寝かせるほど熟成度は高くなり、良質のものが出来上がります。神のみことばの知性的な蓄積も、静かな沈黙の中で熟成されていきます。芸術家たちは、ひとたび与えられた感動を直ぐには人と分かち合うことはしません。彼らはその感動を心の中で熟成させ、あるひとつの表象となるまで沈黙するのです。この黙想の領域は大切です。それは神との沈黙の交わりです。ことばに出して表現する必要はありません。自分の口からやがて出てくるのを待つのです。それは文章化されたものであったり、賛美の歌として歌われるものであったりするかもしれません。

●観想の祈りの領域は、感覚の領域です。感じる世界です。たとえば、「私は神の愛を感じます。」「神の御手が私の上に置かれているのを感じます。」「神の優しい御声が聞こえます。」「神の御顔(スマイル)が見えます。」「ここには神の臨在の香りがします。」「神のみことばは私の口に甘く、おいしく感じられます。」「・・・このような表現は、霊的な五感(視覚、聴覚、味覚、触覚、臭覚)で神を感じ、神と交わっているのです。特に、この観想の領域に敏感な人は、ある意味で直感型(ヨハネ・タイプ)と言われる人かもしれません。あるいは、瞑想の領域に秀で、ことばで説明しないと気がすまない人は、論理型(パウロ・タイプ)と言われる人かもしれません。私たちの中にはその双方が与えられています。ただ、その比率が違うだけなのです。神を認識する方法や領域に違いがあったとしても、それらの相補性を私たちは大切にしていけるべきです。口頭の祈り、瞑想の祈り、黙想の祈り、そして観想の祈り、そのいずれもが詩篇の中に織り込まれているのです。

3. 瞑想することの大切さ

(1) 知性による熟考の訓練

●瞑想は、祈りにおいて、知性の部分がとても強く働く段階です。瞑想から黙想へ、そして観想へ進んでいく上で、瞑想の段階でひとりよがりな受け取り方をしてしまうと、あとが大変です。できるだけ、みことばの正しい概念や意味合いを理解しようと務めることが、瞑想の第一段階です。その段階を安易に乗り越えてしまうと、ただ単に「私は・・・のように感じます」で終わってしまいます。



●瞑想には、みことばを(聖書全体の把握と個々のみことばの意味も含めて)学ぶという時間をかけた訓練が必要です。その訓練は生涯続きます。このために、必ずしも神学校に行く必要はありませんが、できれば、みことばの瞑想をしている方と共にするのが一番の早道です。

●スポーツ選手がたゆまず練習して自分を訓練し、技術を磨き、経験を積むように、詩篇の瞑想もそれと同じく専心さを必要とします。瞑想とは、全人格を傾けて神のみことばを聞き、神が私たちに望まれる生き方をするために、知性をもって熟考することを意味します。ゆっくりと、時間をかけて、神を知り、神の世界に生きる喜びを味わう世界—それは測り知れないほど心の満足をもたらすことと信じます。そのためには、現代の多忙さと喧騒、そして気まぐれな風潮の中にあつて、神に専心する自分の時間を取り戻す努力—意識改革、生活改革—が求められます。

(2) 神を知ること

●詩篇の瞑想の旅は、神をより深く知ることであり、神と共に生きる道や知恵を模索することです。旧約時代の人々が、神からの啓示によって、神をどのように受けとめ、神を体験したのかを知ることは私たちに励ましをもたらしてくれるのです。特に、祈りが聞かれないように思えるとき、私たちは神への不信や失望に陥らないよう警戒しなければなりません。

●詩篇 22 篇を味わうならば、こうした現実にぶつかった人がいることを知ります。

わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。

遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。

わが神。昼、私は呼びます。しかし、あなたはお答えになりません。

夜も、私は黙っていられません。

けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。

私たちの先祖は、あなたに信頼しました。彼らは信頼し、あなたは彼らを助け出されました。

彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。

彼らはあなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。

●この詩篇の作者は、祈りにおいて三つの困難を覚えたようです。

① 祈っても神をそばに感じるができなかったこと。

② 苦悩から助け出されなかったこと。

③ 祈り続けても何も生じなかったこと。

しかし彼は、祈りにおけるこのような経験は、歴史において初めて自分に生じたものではないということに気がつきます。「私たちの先祖は、あなたに信頼しました。彼らは信頼し、あなたは彼らを助け出されました。彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。彼らはあなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。」

●彼は、あらゆる時代の先祖たちが残した「祈りは力である」というあかしの蓄積を知ったのです。それゆえ、彼は賢くも、数ヶ月間の個人的な失敗を、幾世代の民族の経験を無視して考えることは、愚かであるという結論

אגרת שאול אל האפסים

に至ったのです。そしてすべての人にとって、祈りはどのような意味を持っているのかを考えた末、祈りにおける問題は、おそらく自分自身にあるのであって、祈りそのものにあるのではないことに気がつくのです。そこで、彼はできることならば、祈りの意味を明らかにしようと努力し、同章 21、22 節において、「・・・あなたは私に答えてください。私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。」と誓いを立てています。ここにおいて、この詩編は「嘆きから賛美へ」と転換するのです。

●最後に『祈りはことごとく答えられた』という詩を紹介しましょう。これは、南北戦争に従軍したある無名兵士が記した詩だと言われています。

私は、目的の達成を願って力を願い求めた。

しかし神は、謙遜に従うことを学ぶようにと、私を弱くされた。

私は、もっと大きなことができるようにと、健康を願い求めた。

しかし神は、よりすぐれたことをするようにと、私に病を送られた。

私は、幸せになりたいと豊かさを願い求めた。

しかし神は、賢くなるようにと私を貧しくされた。

私は、人の賞賛を得ようと、力を祈り求めた。

しかし神は、神の必要を覚えるようにと、私に弱さを与えられた。

私は、人生を大いに楽しもうと、あらゆるものを祈り求めた。

しかし神は、あらゆることを喜べるような人生を私に与えられた。

求めたものは何一つ受け取らなかったが、その祈りはことごとく答えられたのだ。

すべての人々の中で、私は何と豊かに祝されていることか。

最後に

●聖歌の「楽しき祈りよ」という歌を歌うことができた人たちは、祈りの生活を本当にエンジョイしていたのではないかと思わされます。このことばの中に祈りの豊かさが証しされているように思います。サタンはこのような神との親しく交わる祈りが大嫌いです。それゆえ、私たちが祈りの生活を建て上げようとするならば、サタンの策略は打ち破られていくと信じます。サタンに嫌われても、神に喜ばれる道を歩みましょう。ともに!!